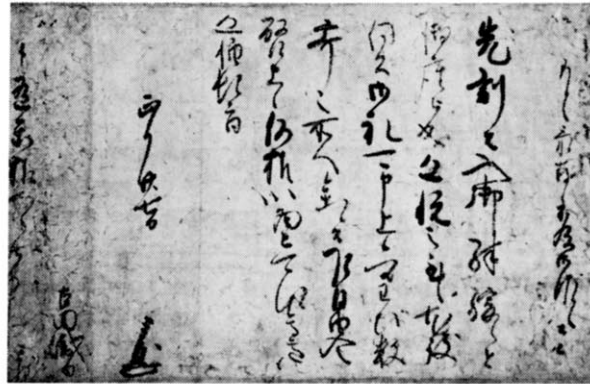


織田有楽宛古田織部書状〈第二回雙柏文庫展より〉



古田織部から織田有楽に宛てた書状。有楽がわざわざ訪ねたことに対して、本来ならばお礼に向向くところではありますが、わび数寄のところへ参りますので、とりあえず書状をもってお礼を申上げ、いずれお目にかかって御意を得たいと思います。お返事には及びませんという意味です。

古田織部（1544—1615）は美濃の国の出。名は重然、通称左介。豊臣秀吉に仕え、天正13年（1585）従五位下織部正に任ぜられたので織

（釈文）

尚々忝存候。不及御報候。己上

先刻者、入御殊緩々と

御座被成、恐悦之至候。尤致

伺公、御礼可申上候へ共、わび数

寄之所へ参候間、乍自由令

啓上候。何様以面上、可得尊意候。

正月廿七日

重然（花押）

古田織部

有楽様人々御中

重然

部と称したのです。茶道を千利休について学び、その弟子の随一と称せられ、関ヶ原役後は一万石の大名として伏見に在り、大名織部の茶湯が一世を風靡しました。織部は豪放で洗煉された感覚をもって茶室や道具に創意をこらし、織部窓、織部燈籠、織部焼など芸術にも不朽の名声を遺しました。

二代将軍家忠に台子茶湯を伝授し、天下和尚と称せられました。大坂夏の陣には大坂城攻めの徳川方の背後を衝く陰謀をたて、それが露頭したため伏見の邸で切腹、奇しくも師の利休と同様不慮の最後を遂げたのです。

宛名の織田有楽（1541—1621）は本名長益、信長の弟で、本能寺の変後はしばらく隠れていましたが、のち秀吉に仕え摂津内に二千石を知行し、淀君の後見をつとめたといわれています。関ヶ原役後の難局にはもっぱら茶湯三昧にすごし、大坂の役後は知行を子にゆずって隠居、のち江戸に出て、その邸跡は現在の有楽町、数寄屋のあとは数寄屋橋の地名として今にのこっています。

利休に学んだ織部と有楽は、それぞれに大名茶人としての人生を送りましたが、上記の書状はその二人の日常の親交を物語る興味深い資料であります。